

ベルクソン 『創造的進化』 第二章における内面の原一本能および生の因果性と「何ものか」

——生物進化における発展的自己対立関係ならびに形而上学的経験における他者の拡張と他性

宮崎 隆

『創造的進化』第二章においてベルクソンは、生物進化に関して、二種の因果関係を区別する。いささか長くなるうえ極めて難解な一節だが、引用から始めたい。小論は、その全体がこの引用の解釈である。

「われわれの知性は、対象が何であれ……対象そのものに代えて……近似的な等価物を置く……。これに対して、各々の瞬間が一つの寄与たること、新しいものが絶えず噴出すること、形態 *forme* が誕生し、当の形態について、一旦産出されてしまったなら、それはその諸原因によって限定（＝決定）された結果、*un effet déterminé par ses causes* だとおそらく人は言うことになるが、しかし今の場合、その類上唯一無二なる諸原因が当の結果の部分をし、結果と同時に体を得て、それで諸原因は、自らが結果を限定する分だけ、結果によって限定されるのであるからには、当の形態が何になるかが予見されると想定することは不可能であったということ。そうしたことにあって何ものか、*quelque chose* をわれわれは、自らの内で感取 *sentir en nous* し、自らを超えた外面において共感をとおして暴露 *deviner par sympathie hors de nous* しうる。しかし当の何ものかは、純粹悟性の用語では表現できない。……われわれの悟性が探求し、いたるところで繰り返し見出す因果関係が表現しているのは、われわれの巧な営為（産業）*industrie* の機構のほうであり、当の営為においてわれわれは、同一の諸要素で同一の全体の再構築を際限なく繰り返す。

返す。……われわれの悟性にとって、優れて目的なるものは、われわれの巧な営為（産業）の目的性なのであり、当の営為において人は、事前に与えられた範型に基づいて作業を行う。……本来の意味での発明創出 *invention* はといえば、もっともそれは巧な営為（産業）そのものの出発点なのではあるが、われわれの知性はそれをその噴出において、すなわちその不可分な面においても、その創発性において、すなわちその創造的な面においても、把握 *saisir* するには至らない」（EC,165）——引用 A

引用 A から小論の基本となる対立関係を取り出しておこう。われわれの認識機能に関して、知性と感性——「感取」ならびに「共感」——とが対立関係に置かれている。二種の因果関係はそれぞれの認識機能に関わる。「知性」あるいは「悟性」⁽²⁾の認識対象が近代的な機械説の因果関係なり、古典的な目的説の因果関係なりである（cf. EC,179）のに対して、生の因果関係⁽¹⁾にあって「何ものかをわれわれは、自らの内で感取し、自らを超えた外面において共感をとおして暴露しうる」。前者を「因果律」、後者を「因果性」と呼んで区別するならば、因果律における原因と結果との関係は、機械説にせよ目的説にせよ、一方向的である。これに対して、因果性は双方向的である。「諸原因は、自らが結果を限定する分だけ、結果によって限定される」。また因果律のほうは「創造」を否定し、「同一」の諸原因が「同一」の結果をもたらすという「既知のもの」の「反復」（EC,164）において成立する。知性的

な「法則」(EC, 12, 16, 19-20, 227-32, etc.)である。因果律が表現しているのは、事態の側ではなくて、「われわれの巧な営為(産業)」の機構のほうである。知性の提示する因果律は、それを生の領野に適用するなら、「作為的 artificial」(EC, VIII, 3-4, 20-3, etc.)な産物、一種の作為観念となる。この面では、機械説と目的説とは同じ穴の貉である。「機械的因果関係も目的性(=目的因果関係)も、生の過程について満足のゆく翻訳を与えることはない」(EC, 179, cf. 162-3, 177)。知性の産物である以上、因果律は認識論の文脈のうちには収まる。因果律は、知性の側が認識対象に課す「知性的枠組」(EC, 178, cf. IX, 149-52, 176, 179)の一つであり、そうした枠組の投射による認識においては、認識対象は内容上、認識する者にとつてしか存立しない。そうした認識は認識者に相対的である (cf. EC, 153)。知性による認識は認識論的相対性を免れない。因果律については、カントの提示する諸範疇の一つたる因果関係がベルクソンの念頭にあると解される。これに対して、因果性は生物進化という事態の側の表現である。因果性は生物進化上の出来事であり、「諸原因」から生物進化上の「形態」が「結果」してくる。また「発明創出」も生物進化上の中心的な事態の一つである。「生の理論」の文脈に移っている。因果律を生物進化という絶えず変化する事態に適用するなら、適用対象からはずれが生じる。「同一」的な因果律は、生物進化の「近似」しか与えない。これに対して因果性は「創造」という事態にほかならず、しかも同時に、当の事態にあつて「何ものか」が「われわれ」人間の感性に授与される。生の因果性においては、認識論的絶対性が成立しているであろう。感性においてなら、「認識の理論」と「生の理論」は相互に規定し合う。両者は互いに「不可分」である (EC, IX)。諸原因が結果を産む際、一方で事態の側においては、諸原因は「唯一無二」なる類のものである。因果性は一回性の事態である。その「歷程の各々の時間契機には、何か新しいものが在る」(EC, 164)。「新しいものが絶えず噴出する」。生物進化は、絶えず発達成長 *croître* し成長増大 *grandir* する生そのもの側から、そつとした生ける持続の側から検討されなければならない。他方で当の事態の授与——「認識の理論」——においては、

「何ものか」をわれわれは、少なくとも「自らの内で」感受する。われわれ人間の感性的認識たる内面知——もつとも「共感」に与えられる「自らを超えた外面」は他性に関わっていることだろうが——である。「何ものか」とは、われわれに与えられる生の因果性の一断面のことであるだろう。生に関する「認識の理論」においては、知性(悟性)という認識機能ではなくて、感性——「感取」と「共感」——という認識機能の探究が要求される。

『創造的進化』の生物進化説が『物質と記憶』の形而上学と接合する。『物質と記憶』第四章によれば、カントが「いかなる認識も相対的であり、諸々の事態の基底に精神は到達しえない」と解して、形而上学の終焉を宣告した後にも、まだ「試みるべき最後の企て」が残されているのであった (MM, 205)。「物質と記憶」は、認識論的な絶対を内面の形而上学的経験のうちに探究する企てであった。『創造的進化』は生の因果性において認識論的絶対性を追求しつつ、その企てを引き継いでいる (cf. EC, 177-80, 186)。生物進化上の因果性にあつて問題になっているのは、形而上学上の「何ものか」にほかならない。知性にはこの「何ものか」を理解することはできない。「形而上学」は、「知性の方向においてではなくて、『共感』の方向において」探究されなければならない (EC, 177)。比喩的に表現するなら、その都度独自に「曲線的に変化する生ける因果性は、「実在する本体の曲線 la courbe réelle」たる形而上学上の事態においてわれわれの感性に与えられるだろう (MM, 206, cf. EC, 31, 179)。知性はそれに代えて、因果律といういわば既存の直線をもって、死せる「近似的な等価物」を置くにすぎない。知性は「生けるものを生氣のないものとして扱い、いかなる本体の実在性 *réalité* をも、それがいかに流動的であれ、決定的に停止した固体の形で考える」(EC, 166, cf. 154-6)。知性は、「進展」する生ける対象をも「事物」と化して認識する。

しかし引用 A の短い一節においてさえ、疑問点は多い。三点挙げておこう。第一に、ベルクソンは何故「われわれ」という語を多用するか。感性を問題にするにせよ、ベルクソン進化説においては、われわれ人間の知性は脊椎動物の進化の端に位置するだけのことではないのか。進化説に関しては、

「われわれ」は当の説の外側に立つて議論することを禁じられている。第二に、感性においてであっても、そもそも「生の理論」と「認識の理論」はいかにして繋がらうのか。事態の側に属する生の因果性が、たとえ「何ものか」においてであれ、われわれ人間の認識の側に与えられるなどということがいかにして起こらうのか。事態と認識との関係が、認識論的絶対性と相対性が問題になる。感性的認識の特質を追求する必要がある。同じ問題圏内のことであるが、さらに一方で引用Aにおいて、因果性に関する記述に限って——巧みに、あるいは無理にも——逆に「われわれ」の語が避けられているが、いかにしてそれが許されるのか。他方で何故ベルクソンは、「何ものか」という曖昧な表現を用いるのか。そして第三に、感性と知性との対立関係については、それだけで終わらせることはできない。因果性と因果律との、あるいは「発明創出」と「巧な営為(産業)」との対立関係についても同様である。最後の疑問点について、その困難を簡単に抽出しておく。

困難は、諸原因とその結果たる形態との対立関係に関わる。因果性そのものは「生けるもの」であり、「流動的」な「本体の実在性」を形成している。それは感性の認識対象たることだろう。これに対して、当の諸原因——生物進化を推し進める諸原因——の生み出す結果たる「形態」は、むしろ右に引用したとき「停止」(cf. EC, 105, 108, 114, 130-2)を意味するだろう。アリストテレスの生物論においては「形態」が主題になっており、ベルクソン当時の生物進化説は、そうした「形態」の変化を追跡しているにすぎない(EC, 129)。因果律である。ベルクソン自身の進化説によれば、「当の形態が何になるかが予見されると想定することは不可能であった il était impossible … prévu ce quelle (la forme) serait」(引用A)という位置に立たなければならぬ。形態は未来(過去における未来の条件法)に置かれる。そうでなければ、結果たる形態が「一旦産出されてしまった」時点の視点に、知性の対象に置き戻されてしまうだろう。それこそが因果律における結果にほかならぬ (cf. EC, 176)。持続を「説明」しようとする際に知性の陥る上空飛翔の視点である。『時間と自由』の表現を用いるなら、その際われわれは自己自

身の上に「身を持ち上げて」、自らを「山の高みから観照」することになる(DI, 77, 144, cf. 135-6)。しかるに形態をあくまでも未来に置くなら、結果はどこまでも逃げてゆく。現在の諸原因と未来の結果との間は切断されてしまいうだろう。では、こうした対立関係にもかかわらず、何ゆえ、またいかにして諸原因はその結果たる形態に到らうのか。「発明創出」に關しても同様の困難が伴う。「発明創出」は、知性的な「巧な営為(産業)」の機構と対立関係にある。知性には、だから「発明創出」を「把握」することができない。「把握」するのは感性であることだろう。しかるに、「発明創出」は「巧な営為(産業)」そのものの出発点でもある。当の知性的な営為は「発明創出」たる生の「創造性」に由来する。

ただし見方を少し転換すべきだろう。諸原因が結果に至り、知性的な営為が生(いのち)の創造性に由来するのは、「対立関係にもかかわらず」なのではない。むしろ生物進化のなかで対立関係に至るのである。進化した諸々の生物の現状においては、こうした対立関係はすでに既存のものとなっている。しかし、この対立関係は生物進化のなかでなら調停可能であろう。哲学者ベルクソンが生物進化を扱う所以の一つかもしれない。そもそも感性に対立する知性、因果律を主張する知性が、因果性による生物進化という事態の一つの結果なのである。対立関係は、進化において生物が発展するなかで発生して行く。われわれの人生において、幼少時代に「相互に浸透している個人的諸人格が、成長増大するなかで両立不可能になる」ように、「生は傾向」であって、原初状態においては「一つ」のものたる「傾向」が分岐してゆくのである(EC, 100-1, cf. 176, 177)。もともと、ちょっとした注意が必要だろう。諸原因と形態との対立関係は、形態が結果であるかぎりにおいて発展的關係でもある。知性的な営為も発明創出から発展してくる。したがって問題になっている対立関係は、分岐した先における相互の対立関係ではない。生物進化における原初状態と当の原初状態が分岐しつつ発展した先との対立関係、発展的自己対立関係である。『創造的進化』第二章においては、この関係が通奏低音のように響いており、因果性に関する議論を支えている。小論は発展的自

己対立関係を起点に取って、ベルクソン進化説における生の因果性、ならびに当の事態にあつて感受される「何ものか」を、感性の側からいささかなりとも解明しようという試みである。そのためにまず發展的自己対立関係を定式化した上で、「直観」を少し分析し、内面への帰還を概観する。その概観を介して、生の理論と形而上学において、「共感」を中心に、内面で感受される「何ものか」の内実を検討してみたい。『創造的進化』第二章においてわれわれは、『物質と記憶』第四章において解明された他性に関して、形而上学的経験の拡張を見出すことになるだろう。

一 發展的自己対立関係と原—直観—認識論的絶対性へ

『創造的進化』第二章末尾においてベルクソンは、人間（人類）を動物と対立せしめ、人間における内面への帰還を指摘している。なるほど第二章の中心的な論点たるベルクソン進化説によるなら、地球上においてアメーバに似た原初の生物 (EC,100,121) が進化してまず、植物と動物とに分岐した。さらに動物は主に節足動物と脊椎動物とに分岐し、それぞれにおいて「本能」〔直観 intuition〕ならびに「共感 sympathie」と「知性」とが進化発達してきた。こうした分岐は進化の發展してゆく方向を、そうした生の傾向 (EC,53,100-2,110-1, etc.) を示しており、生物の種は發展するに依じて、「相互の対立関係を強めてゆく (cf. EC,117)。これを「發展的相互対立関係」と呼んでおこう。分岐はいわば対等である。原初状態において一つの種であった生物は、進化するなかで分岐して傾向を分かち、その一つの端において人間に至り着く。人間は脊椎動物の一種として、知性方面の進化の端に位置する。發展的相互対立関係によるかぎり、したがって知性的な動物は節足動物と対立し、本能を、直観や共感を有することはない。しかるに第二章末尾によれば、対立関係は動物と人間との間に置かれる。「諸々の動物と人間との間には、もはや程度の相違ではなくて、本性の相違が存する」(EC,183, cf. 106)。本能の側において進化の「地平がたちまち閉じてしまった」(EC,183)

のに対して、知性の側においては「動物から知性への一気の跳躍」を通して「出口」が獲得されるからである (EC,186)。地球上の生物進化において知性は特異な位置を占めている。これが小論冒頭に挙げた第一の疑問点に対する答えである。生物進化は「われわれ」人間において突破口を見出した。どこへ、か。「内面」へ、である。ベルクソン哲学にあつては、生物進化は知性の側において知性を超え出て、さらに「ほかでもない生の内面 l'intérieur même de la vie」(EC,178, cf. 100,103,166) への帰還に到る。それが可能なのは唯一、われわれ人間においてである。そして当の内面における認識が感性的な「直観」ならびに「共感」——いっそう精確には、本能と知性へと分岐する以前の原—本能たる原—直観ならびに原—共感——である。

何故、対等な分岐をもたらすはずの發展的相互対立関係から、知性の特異な位置づけが生じてくるのか。同じことだが何故、内面への帰還は、また非知性的な節足動物にこそ許されるはずの直観や共感が、人間において可能となるのか。この問いに答えるには、人間への進化を發展的自己対立関係のうちに置き戻してみる必要がある。

發展的相互対立関係に一つの補助定理を加えてみよう。それぞれの生物種がその進化の初期に有していた機能や傾向は、それが当の進化の主要な方向と対立するとしても、進化を妨げないかぎり、未成熟な「初源状態 état rudimentaire」(EC,107,109,111,114,117,119,180) のまま一種の記憶として残存する、と。ベルクソンはこの補助定理を認めるだろう。

「通常は眠り込んでいる諸記憶と並んで、覚醒し作動している諸記憶も在る。その活動が主要な支脈の傾向のほうの展開發展の邪魔にならない諸記憶がそれである。してみると以下の法則を立言することができる。すなわち、一つの傾向が「進化して」展開發展しつつ分解する際、そのようにして生まれる特殊な諸傾向の各々は、そうした原初の傾向について、それ自らの特定化した働き〔たる当の特殊な傾向〕と両立不可能でないかぎり、そのすべてを保存し展開發展させようとす」(EC,120) — 引用 B

引用Bは、植物と動物との分岐ないし「分解」を扱いつつベルクソンの提示する「法則」である。しかし「法則」である以上、それを生物進化一般についての補助定理と認めてよいだろう。脊椎動物と節足動物の進化発達にあってはめてみよう。節足動物と脊椎動物の進化の方向をそれぞれxとyとし、その元の「原初の傾向」たる原初状態をそれぞれx'とy'とする。xとyは「主要な支脈の傾向」であり、それぞれが本能と知性の発達してゆく方向である (cf. EC, 186)。ところで發展的相互対立関係によれば、両者はその展開発展の初期におおては同一の生物種を形成して来た (cf. EC, 142)。原初状態においては「傾向」は「一つ」である。そして「進化発達は、起源においては相互浸透していた様々な支脈を、それらを極限まで展開発展させるべく、互いに引き離すばかりである」(EC, 176, cf. 117-20)。脊椎動物のほうを取り上げるならこうなる。脊椎動物においては、進化すればするほど、その進化の方向yは、節足動物の進化の方向xから乖離してゆく。しかしながら、進化した脊椎動物yにおいて、脊椎動物と節足動物との原初状態x'とy'とは「相互浸透」して「一つ」になっており、「原初の傾向」の「記憶」として残存しうる。それは「文字通り始元の何らかの傾向」の「痕跡」(EC, 119)であり、一つの生物種における種の記憶⁽¹²⁾である。それどころかむしろ、進化発達した脊椎動物yは、進化の現状においてx'を、少なくとも「両立不可能でないかぎり」、x'もy'も生ける傾向として「保存し展開発展させようとする」。ただし、脊椎動物においてはy'がyへと成長発展する以上、y'の残存はyへの進化に反しており、y'はyと「両立不可能」であろう。してみると脊椎動物yにおいては、自らと發展的相互対立関係にある節足動物xのその原初状態x'こそが古い層に／として残存し、保存されている。節足動物xにおいても同様である。かくしてわれわれは、發展的自己対立関係を得る⁽¹³⁾。すなわち、進化発展するなかで、それぞれの生物種は、むしろ自らと分岐し対立する側の他の生物種の原初状態を、現状に残存する古い層に／として、可能なかぎり「保存し展開発展させようとする」。ただし原初状態は通常は「潜勢

ベルクソン『創造的進化』第二章における内面の原一本能および生の因果性と「何ものか」 宮崎 隆

的 virtue] (EC, 107, 119, 182-3) に留まることだろう。しかも当の原初状態は、定義上、未成熟のままに、まさしく「初源状態」のままに留まるほかない (cf. EC, 108, 113)。脊椎動物yにおいて、もしその原初状態x'が成熟するなら、脊椎動物yかつ節足動物xとなって發展的相互対立関係に抵触する。あるいはそうでなければ、脊椎動物yが節足動物xに成つてしまふ。かくして一方で本能的な節足動物の現状においても、未成熟な知性が潜勢的に「深層 profond」に、その古い層に隠れてゐる (cf. EC, 120)。「昆虫の最も完成された本能も、幾らかの知性の微光を伴う」(EC, 143, cf. 136-7)。他方で知性的な脊椎動物についても、「知性たる光輝く核の周り」——「核の周り」といった空間的な比喻表現は警戒を必要するが——に「本能」は「漠たる雲霧を形成」している (EC, 178, cf. 136)。なるほど脊椎動物は、節足動物と分岐してきた以上、定義上、節足動物の本能そのものを有することはない。しかし發展的自己対立関係において、脊椎動物は節足動物の本能(直観ならびに共感)をその原初状態において保持している。この原初状態の本能を「原一本能」(「原一直観」ならびに「原一共感」と呼ぶなら、知性的な脊椎動物こそが、節足動物との分岐以前の原一本能を自らの古い深層に／として保持している。生物進化の現状において知性的な進化の端に位置する人間も、自らの深層において、生物進化上の古い層たる原一本能を、「感情 sentiment」を感受し「経験」している (EC, 176)。人間の有機体たる身体に刻まれている種の記憶であり、「われわれが自ら携えている生まれる以前の態勢 dispositions prénatales」(EC, 5)にはかならない。こうしてわれわれ人間における感性和知性との対立関係が、原初の生物から脊椎動物へと進化発展するなかで発生する。それだけではない。原一直観についてはこうなる。節足動物の直観は極めて精巧な「体得知 savoir」(EC, 146-7, 140, 173, etc.)であり、行為知であるが、しかしそれぞれの生物種ごとに、その「利害関心 intérêt」に応じて或る「特定の対象」しか認識できなさ (EC, 150, 179, cf. 141, 146-7, 172, etc.)。認識内容は限定されている。節足動物において「意識は、「原一」直観を本能に切り詰めなければならなかった。すなわち、自らの利害関心に関わる、生の極め

ベルクソン『創造的進化』第二章における内面の原一本能および生の因果性と「何ものか」 宮崎 隆

六

て卑小な持ち分しか包摂しないことになった」(EC,183)。なるほど「利害関心に関わる」とはいえ、本能の直観たる体得知は、知性認識におけるがごとき認識論的相対性を免れる。認識する側の作為はない。あくまでも事態の側に即した認識であり、認識対象の曲線を辿ることだろう。しかし本能の認識対象はその内容上、当の「利害関心」に応じて「特定」化されている。知性とは別の意味で、認識論的に相対的である。いっそう精確に言うなら、認識論的に限定されている。これに対して原一直観は定義上、少なくとも節足動物の様々な生物種の「体得知」を、あるいは節足動物へと進化するなかで失われてしまった「体得知」があるなら、さらにそれをも含んでいる。認識論的に非限定である。その極限においては、認識論的絶対性が成立していることだろう。われわれの感情—感性—における形而上学的経験、形而上学的認識である (cf. EC,179)。原一直観の認識対象—それを「対象」と呼べるのだが—の内包は「漠たる vague」(EC,111,176,178-9) ものであるにせよ、あるいはむしろ「漠たる」ものであるからこそ、外延は豊かである。「われわれと爾余の生けるものとの間」(EC,179) の認識関係である。極限においてその外延は、地球上の生の広がり全体を網羅する (cf. EC,102)。人間の感性的認識の第一の特質である (存在論的絶対性につまわる第二の特質については後述)。こう言い換えてもよい。節足動物の本能の認識対象はその「特定」化に応じて、生物種間で強選言の関係になっている (cf. EC,172)。これに対して、脊椎動物の一つの生物種における原一本能の認識対象は、「漠たる」対象として一つに融け合い、連言の関係にある。ベルクソンの比喩に従って、節足動物のそれぞれの種を円周上の特定の点に置くなら、原一本能はその中心を形成している。あるいは音楽の主題と様々なその変奏である (cf. EC,172-3,168) と。かくして、発展的相互対立関係において本能から最も遠くに進化発展してきた人間においても、あるいはむしろ人間においてこそ、その原一本能には豊かな対象が開かれている。

「本能は共感である。もしこの共感に、その対象の範囲を拡大し、かつ

また、自らに反響する」と *réfléchir sur elle-même* が可能なら、共感^は生の働き掛けの鍵をわれわれに与えることになる」(EC,177) ——引用C) 典型的な反実仮想の条件法の文章であり、「本能」であるかぎりでの「共感」あるいは「直観」には不可能な事態として、「対象の範囲拡大」が語られている。「範囲拡大」は脊椎動物にこそ「可能」なのである。そのように「範囲拡大」された本能たる直観こそが、「われわれ」における真正の「内面」の知であり、原一直観である。初源の「内面」の直観たる原一直観がそのように豊かなのは、それが未成熟であるだけに、その対象が内容上「利害関心を脱し *désintéresser*」しているからである。そうした「内面」にこそ、「生の働き掛けの鍵」が在る。

「原一」直観はわれわれ「人間」をなら、まさにほかでもない生の内面へと導く。私が言いたいのは、利害関心を脱した本能、自己^はについて意識する本能、自らの対象に反響し、当の対象を、無^は際限に押し広げうる本能のことである」(EC,178) ——引用D

かくしてこうなる。ほかならぬ「われわれ」人間の原一直観にこそ与えられる豊かな「生の内面」は、われわれ人間の深層を成しており、それとしては生物進化上の古い層たる原初状態に等しい。原一直観は、その対象の内容の豊かさにおいては直観の「範囲拡大」であり、生物進化上、未成熟なまま残存する原初状態の知である。「生の理論」において提示される原初の生物、本能と知性とに分岐してしまう以前の生物の知は、進化発達してしまったわれわれ人間にあっては、形而上学的経験において「内面」の知に／知として与えられる。人間の感性的認識である。小論の第二の疑問点における「何ものか」の内実は、この古い深層の知にほかならない。生物進化という事態たる因果性^はあって、なるほどわれわれの認識に授与されるのは、進化の一面にすぎない。ただし「われわれ」が原一直観において感受するのは、原初

状態たる言語に絶する豊かな内容である、と。もつとも、發展的相互対立関係に補助定理を加えて得られた發展的自己対立関係によるかぎり、原一直観は脊椎動物すべてに可能であり、いまだ動物と人間との間の対立関係はかならずしも帰結しない。人間の特異性は、内面の古い深層への帰還の可能性に存している。

二 意識の自由な解放と内面への帰還——形而上学における還元と生の理論における発生

内面への帰還は二つの段階に区別することができる。第一段階は、「利害関心」に縛られ、実践的な対象に向かっていた「意識の自由な解放」(EC,185, cf.101)である。ベルクソンによれば、人間知性も「実践的意識 conscience pratique」(MM,103, ES,132, cf. EC,151,153, MM,50,157)にほかならない。地球上の生物の進化は、いっそう有利に生きて生活してゆくという実践的な方面に向かっている。知性も実践的な認識機能として、本来は生物個体の「外部」の諸対象に向かう(左記の引用E)。知性も本来は行為に結実する。そのように「外部」の世界へと向かっていた意識が、実践的な利害関心から解放されて自由になる(cf. EC,142,152)。意識はもはや「実践的意識」ではない。知性の方面に進化してきた脊椎動物は、人間において知性を超え出る。「範囲の拡大」された直観たる原一直観であり、それはまた実践的な限定から解放され、認識内容上も絶対性に向かって非限定になった「意識」である。皮肉なことに、進化の過程において

「自らを、限定して、知性となつた意識……はまさしく外部の諸対象に適合するがゆえに、諸対象のただ中を経めぐって、諸対象が自らに對置する障壁を迂回し、自らの領域を無際限に押し広げるに至る。ひとたび自由に解放されるや、意識は角度を変えて、内面へと折れ戻り、se replier à l'intérieur、自らの内でもどろんでいる直観の諸潜勢性 les virtualités

ベルクソン『創造的進化』第二章における内面の原一本能および生の因果性と「何ものか」 宮崎 隆

intuitionを目覚めさせることができる」(EC,183)——引用E

物質を制圧するおかげで、人間の「意識」は物質から自由になって解放される。知性の進化こそが、「内面へと折れ戻」ることを、内面への帰還を可能にする⁽¹⁵⁾。知性を進化発達させた人間のみが、他の動物と異なつて、「直観の諸潜勢性」を、原一直観の豊かな力量を「目覚めさせることができる」。人間の「意識」は、脊椎動物の知性となつた意識——実践的意識——の状態から解放され、内面の意識——思弁的意識——へと帰還する。原一直観たる形而上学的経験である。内面の意識は、外部の意識とは一次元異なるのである。しかも引用Eにおいては、意識の「自由な解放」という形而上学的経験への還元は、原初において非限定であつた意識の自己限定という発生の方向へと投げ返されている。發展的自己対立関係である。知性方面への意識の自己限定にほかならない。原一直観たる内面の思弁的意識、感性的な意識が「自らを限定して」、実践的意識たる知性的な意識と成つていたのである。ちなみに本能についても同様である。既述のように、思弁的意識が自らの原一直観を「本能に切り詰め」たわけである。したがって、こうした「限定」が解除されて意識が「自由に解放」されるなら、原初状態の内面性が今や発現してくるだろう。しかしながら知性は、発達すればするほど、原初状態から遠ざかるのではなかつたのか。では、内面への帰還はいかにして達成されるのか。發展的自己対立関係が、それだけでこの帰還を保証してくれるわけではない。『物質と記憶』の記述を踏まえつつ、簡単に整理してみよう。

この前著によれば、人間の生および人間が生きて生活する際の経験は、「思弁」の領野と「実践」の領野との区別を中心に、四つの水準に分けられ、以下のように整理できる。思弁の領野たる形而上学的水準とは、われわれ人間の内面のことにほかならず、二つの水準——第一水準と第二水準——に区別される。第一水準は「純粹記憶力 la mémoire pure」と「純粹知覚 la perception pure」と二つの「始元éléments」(MM,202)から成り、第二水準において、この二つの始元の邂逅が形而上学的経験たる人間の思弁的意

識に与えられる。この邂逅において両者が混合し「運動性 *mobilité*」が、「持続」がもたらされる。「本体の実在性」である。われわれにあっては、それは本源における心身結合となって経験される。「形而上学」と「経験」とが相容れないのは、実践の領野に定位するからにすぎない (cf. EC.178-9)。実践の領野のほうは、われわれの「人間的経験」の領野であり、そこにおいて「われわれが経験であると信じているもの」(MM.205-6) が存立する。『純粹理性批判』に謂う「経験」である。こちらもやはり二つの水準——第三水準と第四水準——に分かたれる。が、いずれにせよ「人間的経験」たる実践的意識の対象は「事物」であって、当の対象は認識する者の「外部」に存する。広義の知性の領野である⁽¹⁶⁾。第三水準は身体習慣に従って行為する日常生活の水準である。日常的な感覚経験もこの水準に属す。これに対して第四水準が狭義の知性の水準であって、純粹知性はその極みに位置する⁽¹⁷⁾。そしてそうした実践的機能たる知性には、本能の場合と違って、行為の複数の選択肢が提示される。

この四つの水準に鑑みるなら、右に引用した『創造的進化』の一節、「動物から知性への一気の跳躍」を通してなされる「出口」の獲得は、第四水準からの超出を表現している (cf. EC.179)。『物質と記憶』における四つの水準を重ねる関係によって思い描くなら、『創造的進化』における知性方面の生物進化は四つの階梯に区別され、ほぼそれに対応する⁽¹⁸⁾。二つの「始元」の邂逅は、地球上におけるアメーバにも似た原初の生物の誕生に結実する。第一水準の形而上学的な二つの「始元」は、『創造的進化』において「*la vie*」そのものと「物質性 *la matérialité*」とどう「二つの始元」(EC.180) に置き換えられている。生一物たる「生ける物質」(EC.141,23,30,71,94) とは、文字通り生と物質性との混合である。われわれ人間における形而上学上の内面は、生物進化における原初状態に対応する。してみると生の因果性も、それが「本体の実在性」を成している以上、「二つの始元」から成る。あるいはこう言ったほうがよいかもしれない。『物質と記憶』において形而上学的経験が二つの始元へと還元されたのに対して、『創造的進化』においては、「実

在する本体」たる因果性が二つの始元から発生してくる、と。『物質と記憶』によれば、「われわれ」の形而上学的経験が経験の限界であって、二つの始元の混合によって発生するはずの「実在する本体」のその「曲線自体の形」は、一般的には「再構成」するしかなかった (MM.206)。「物質の領野 *l'univers matériel*」(EC.15,241,237,340, MM.65,279, cf. 222,237) との混合であるにせよ、経験する「私」が考察の中心に据えられていたからである。そうした混合がわれわれの形而上学的経験に与えられる唯一の例外、それがわれわれ自身の心身結合という経験なのであった。これに対して「創造的な進化」を扱うなら、「実在する本体」の発生を、しかも生物一般に拡張しつつ因果性において解明することができるだろう。生物進化の第二階梯における身体を有する生一物の発生——古い層——は、進化発達した現状においても、未成熟のまま、われわれ人間の深層に現存し、われわれの感性に与えられているからである。『物質と記憶』において提示された形而上学的経験は、生物進化の初源状態の経験へと拡張される (EC.179)。「創造的進化」の主たる目論見である。付言するなら、原初の生物においては内面と外部との区別が未だ曖昧であり、その分だけ明確な内面性を認めるわけにはゆかない。これに対して、われわれ人間における形而上学的経験の内面性は、外部性と対比することができると言える。

第三・第四階梯についてはこうなる。脊椎動物たる人類における知性方面の進化発達には、第三の階梯における日常的な「巧な営為 *industrie*」から第四の階梯における知性的な工業化による「産業 *industrie*」に至る (EC.V, VIII,139,162-3,165)。「巧な営為 (産業) の機構」(引用A) とは、*帰するところ*の知性 (なごし「理合力」) の「機構」にはかならない⁽¹⁹⁾。第三階梯の行為習慣から第四階梯の極みにある純粹知性——たとえば近代の自然科学をもたらす知性——へと進化発展するのは知性的な実践的意識であり、因果律を支持するような「同一」性の原理がそうした実践知を徹底している⁽²⁰⁾。それはまた、物質方面への進化発展でもある。物質性の側から見るなら、一旦は生と混合して生物と成った物質性は、知性方面の進化において、再び物質性の側に

傾斜する (cf. EC,177)。しかるに第四階梯にまで至るのは、「発明創出」のおかげでもある。「発明創出」に関してベルクソンの記す一節 (EC,183-4) によれば、それは一種の原因として、さらに別の「本質的な結果たる効果 effect」をもたらす。結果たる効果には二種があり、それが小論冒頭に挙げた第三の疑問点に対する答えの一部を導く。引用 A に関連して述べたように、「発明創出」は、人間の知性的な「巧な営為 (産業)」の由来するところであるばかりか、それ自身が生の創造性なのであった。「発明創出それ自身に対して、発明創出の諸帰結には異常な不均衡」がある。すなわち知性の宗とする「製作」は、一方で製作物を産み出す。それは「発明創出そのものの物質上の成果」である。「発明創出」は「われわれの巧な営為 (産業)」における知性方面の進化を貫いて、人類に発明物をもたらす。ただしそうした「製作」なら、原理的には脊椎動物たる他の何らかの「知性的な動物にも為しうる」。しかるに「製作すること」は、他方でそのことのゆえに、「人類」をして「物質の主人たらしめる」⁽²¹⁾。「発明創出」は、知性が関知せずとも、「本質的な結果たる効果として、われわれをわれわれ自身の上へと高め、そのゆえに、われわれの地平を押し広げる」。第四階梯からの超出である。知性の進化発展を今度は、生の側から見なければならぬ。「発明創出」における生の創造力は、一旦は物質と混合して生物と成って知性の進化発達に貢献した後、「自由解放」される。

ただし第四階梯からの超出は、第五階梯への飛翔を意味するわけではない。むしろ「自由な解放」は、内面への帰還の第二段階の準備である。「われわれ自身の上」とは、われわれの内面のことにはかならない。ベルクソンは続けてこう語る。「この場合、結果たる効果と原因との間の不均衡があまりに大きいので、原因をその結果たる効果の産出者とみなすことは困難である。原因はその結果たる効果の止め金を外す」 (EC,184) にすぎない、と。「発明創出」という原因は、自らの「結果たる効果」を押し留めていた「止め金を外」して、それを発現せしめるのである。「機会」原因の一種である (EC,73-4)。やはり「止め金外し」は何をもたらすのか。

「結局のところ事態すべてはあたかも次のように進行する。すなわち、物質に対する知性の掌握は、物質が押し留めている何ものかを通して、めることを主に目差すところとしていたかのように」 (EC,184)——引用 F

発現してくるのは、「押し留め」られ、抑圧されていた既存の「何ものか」である。そのゆえにこそ「結果たる効果」は「本質的」なのである。「発明創出」たる原因がもたらすのは、ほかでもないそれ自身の働きへの帰還、「巧な営為そのもの出発点」たる「発明創出」への、生の創造性への帰還である。感性によって「把握」される創造性である。帰還する先とは、当の「発明創出」の発生、の面なのである。「意識」の、あるいは「発明創出」の「自由な解放」とは、人間において未成熟のまま一種の「諸記憶」(引用 B) として残存している古い深層を開くことにほかならない。逆に言うなら、「自らを限定して知性となった意識」(引用 E) の「限定」が撤去され、非限定になる。発生の元への帰還であり、内面への帰還の第二段階である。引用 A に記されていた「何ものか」とは、形而上学上のこの内面のことなのであった。第一段階たる現在の利害関心からの自由な解放は「止め金外し」という単なる否定的な事態に留まらず、その肯定的な帰結として内面への帰還が達成され、「何ものか」が発現するに到る。

かくして内面への帰還の第二段階は、ベルクソンが機械説と目的説の両者を批判しつつ提起していた目的説の修正に呼応する (EC,186)。初源状態たる「何ものか」の解放を「主に目差すところとしていたかのように」(引用 F)、当の帰還をもってベルクソンの修正目的説は進化説のなかに埋戻される。ベルクソンは『創造的進化』第一章において、「目的説」に対して、「目的性をまったく別の意味方向へと修正しなければならぬ」 (EC,44, cf. 41-3) と提起していた。第二章においては、目的説における「計画」の実現という考えに反対する (EC,102-6)。その際、生物進化における「目的 fin」たる「調和」の位置に関して、いわゆる目的説に修正を加える。目的説が「調和」を

生物進化の「前方に」、「計画」達成という「終局」に置くのに対して、ベルクソンはそれを進化の「後方に」、その起点に置く（cf. EC, 118）。そうやって生物進化における分岐に對立の強調を見て取る。調和とは反対である。

「生は、それが発達進展するにつれて分散して……互いに對抗し、両立不可能となつてゆく様々な顕在様態へと到る」（EC, 104-5）。原初状態においては、一つの傾向のうちに調和を保っていた諸傾向が、進化に応じて顕在化し分岐してゆくわけである。二種の發展的对立關係——發展的自己対立關係と發展的相互対立關係——である。原初状態の調和とは、かくしてまた、人間たる脊椎動物の深層における——「初源的ないし潜勢的 rudimentaire ou virtuel」な状態における」（EC, 119, cf. 107）——調和でもある。連言の關係である。

残る疑問点に思いを凝らすときが来た。それは、ベルクソン進化説において「われわれ」の古い深層を成す「何ものか」を、形而上学上の内面において考えることである。「何ものか」とその「感取」および「共感」（引用A）について、生の因果性との關係において検討する必要がある。「生」が「物質性」と混合して生一物が發生する際に発現している生の因果性その感受が問題になる。

三 内面の意識における原一共感ならびに形而上学的經驗における他者の擴張と他性——存在論的絶対性へ

「何ものか」という語は、すでに二回引用した（引用AとF）。『創造的進化』第二章においてこの語は、一方では、生物進化上の原初状態を、古い層を意味してゐる（EC, 112, cf. 238）。他方では、われわれ人間という進化発達した現状において未成熟なまま残存している深層を表現している（EC, 136, 165, 176, 180, 184）。また『物質と記憶』第四章における形而上学の文脈のなかにも見出される（MM, 229）。この語は具体的なものを名指すことを避けた単なる一般的な表現ではなくて、本質的に名指すことの困難な形而上学上の特定の事態を指している。深層の感性の領野に在って、表層の

知性による理解を拒否する事態である。生物進化の一断面にすぎないとしても、その原初状態の言語に絶する豊かな内容たる当の形而上学上の「何ものか」をわれわれは内面において感受するのであった。

しかし内面と言つても、『創造的進化』においては、「内 interiorité」に用語上の二義性があり、それゆえ「意識」にも二義性が避けられない（二義性を先取りすることになつてしまふが、知性には「内部」關係の、感性には「内面」關係の訳語を充てた。「外部」「外面」の訳語も同様に使い分ける）。これまで単純化して、知性と感性とをそれぞれ外部の知と内面の知とに振り分け、いくつかの引用を素通りしてしまつた。しかし知に關する内一外の關係には難問が残つている。第一にベルクソンの規定によれば、知性は「内部」の知でもある（cf. EC, 147, 160）。第二に——小論の第二の疑問点と重なるが——「共感」については、「何ものか」をわれわれは「自らを超えた外面において共感をとおして暴露しうる」（引用A）と記されてもいた。ところでわれわれの「共感」とは、われわれの「直観」が原一直観であるように、人間にこそ可能な原一共感のことだと解される。その原一共感が、われわれ「自らを超えた外面」の知だと主張されているのである。さらに「意識」の内面性に関しても二つの難問が待ち受けている。一方は当の原一共感に關わる。引用Dを思い出そう。なるほど原一直観とは一面では、「対象を無際限に押し広げうる本能のこと」であつた。原一直観は「利害関心を脱」しており、その極みにおいては認識論的に絶対的たりうる。これに対して他面では、原一直観は自己知でもある。「自己」について意識する本能である。そして引用Cによれば、そうした原一直観とは「自らに、反響する」原一共感のことである。しかるに引用Dによれば、なるほどそれは自己知であるのだが、同時に「自らの対象に、反響しうる」。では——第三の難問——原一共感において、この二種の「反響」はいかなる關係にあるのか。そもそも直観と共感、あるいは原一直観と原一共感はいかなる点で異なるのか。他方は本能に關わる。本能においては、本能と知性両者の「端緒となる一つの同じ原理」——原一本能——は、「自己自身に対して内面的なままに留まる」（EC, 169）。本能は、認識論

的に限定されているにせよ、その発生元たる原一本能のままに「内面の認識」(EC,150, cf. 183)である。では——第四の難問——外部の行為に向かう本能は、いかなる意味で内面知なのか。しかしいづれにせよ、原一直観がわれわれを「生の内面へと導く」(引用D)のは、認識論的絶対性のゆえではなく、むしろその自己知の自己性のゆえであるだろう。自己性は、認識内容上の非限定性にはなく、認識対象の位置に関わる。自己性においては一切の外部性が排除されており、その「意識」は内面においてのみ成立することだろう。真正の内面性——内面の原一意識——においては、認識するものと認識されるものとの間には隔たりがなく、存在論的に別ものではない。存在論的な絶対性である。節足動物の本能もそれ自体としては、存在論的に、原一本能と同様の絶対性を具えていることだろう。内一外の関係係を簡単に整理し、それを起点に、右の四つの難問を少しずつ解きほぐしてみよう。

第一の難問を取り上げつつ、「内」の二義性から始めたい。本能の向かう先は「外部」である。本能の「認識は外部化しつ」(EC,147)行為に結実する。行為対象は外部に存する。これに対して、知性が「内部」の知であるのは、知性の向かう先が「内部」の「外部」だからである。内部の認識を介して、当の内部に映し出されている外部の行為へと向かう。なるほど一方で知性の認識は内部において成立する。「外側に眼差しを向けていた知性の眼に、丸々内部世界が開かれてくる」(EC,160)。本能とは反対に、知性の認識は「内部化して意識となる」(EC,147)と解される。そうやって意識が現出する。しかし他方で知性とは「外側に眼差しを向け、自らに対して自らを外部化する生であらう」(EC,162)。「外部の認識」(EC,150, cf. 169,176-7,183)にはかならない。「自らを限定して知性となった意識」は「外部の諸対象に適合する」(引用E)のであった。実践的認識機能たる知性は、外部の行為世界を認識する。身体が行為を成就する際のその行為世界が「外部」の空間であり、「物質世界」である。いっそう精確に言うなら、行為空間はそれ自体で現存するのではなく、運動し行為する者たる知性的な動物の進化発達とともに開けてくる(EC,109-12)。「物質世界」とは、知性が作為的に形成した行

為空間なのである。かくして知性の「内部」とは、外部の認識対象の存する場であるかぎりでの内部、外部認識の場たる内部であり、「再現された諸表象 representations」(cf. EC,182)の存立する場である。本質的には実践的な認識の場にほかならない。本能が行為において外部の対象と直に関係するのに対して、知性は認識の場を介して、それゆえそこに現れる再現表象を介して外部と関係し、そうやって行為に行き着く。知性的認識においても、認識そのものは外部へと向かつている。純粹知性という人間知性の見果てぬ夢は、行為へと赴くことなく、実践的な認識の場に留まることを意味するにすぎないだろう。知性も本能と同じく、実践的な認識機能である。ベルクソンが「認識」概念を取り上げつつ、知性と本能との間に在るのは「本性ではなくて、むしろ程度の相違である」(EC,146)と主張する所以である。両者はいずれも、行為に関わり、そのかぎりで、存在論的相対性を免れない。認識するものと認識される行為対象との間には存在論的な隔たりが在る。いづれの認識も存在論的に自己ならぬものを対象とする。発展的自己対立関係は本能と知性の両方面に認められる。原一本能の「内面」たる「内」と知性の「内部」たる「内」も対立関係にある。

「意識」を取り上げても同様である。知性も本能ともに外部に向かう「実践的意識」であり、「内面」の意識(引用DならびにE)に対立する。かくして「意識」にも二義があることになる。両者は次元が一つ異なるのである。知性たる「意識」の向かう先は、再現表象に内部化された外部である。本能の行為におけると同様の外部が、知性においては内部化されているにすぎない。何のゆえの内面化か。

答えはこうなる。ベルクソンによれば、知性も本能も「認識」であり、知性は「意識的認識 la connaissance consciente」、本能は「非意識的認識 la connaissance inconsciente」である(EC,146, cf. 151)。本能が「非意識的」であるのは、無機物たる石の「いっしょに」無意識 conscience *muette* なのではなくて、「相殺された意識 conscience *annulée*」だからである(EC,144)。すなわち本能においても、知性の場合と同様に、「意識」は存在しているが、しかし通

常は現出ししない。通常は本能には複数の「選択肢」が、可能な諸行為が与えられないからである。行為によって意識が「相殺」されているわけである。節足動物の本能は、異なる生物種の間で強選言の關係になっており、それぞれの「利害関心」に応じた「特定の対象」しか認識しないのであった。逆に例外的に選択の必要が生じるなら、節足動物にも、植物にさえ、「意識」の復活する場合が考えられる⁽²³⁾ (EC, 114, 171, cf. 168, 108-13)。本能の「相殺された意識」は、いつでも活性化して現出しうる。これに対して脊椎動物には多くの場合、複数の「選択肢」が立つ。行為を選択することになる。「再現表象」は行為の選択肢を与えているのである。逆に行為が完全に習慣化するなら通常は、本能の場合と同様に意識は現出しなく⁽²⁴⁾ (EC, 145)。かくして、外部が内部化されるのは、行為の複数の選択肢を示すことのゆえである。こうした意識は、それが相殺されていようと現出していようと、行為に関わることに変わりはない。意識の規定そのものとしては、本能のそれも知性のそれも「実践的意識」であり、外部に向かう意識である。知性と本能の間には「程度の相違」しかない。

そして知性的意識において複数の選択肢が提示されうるのは、行為が未達成とされておらず、かつ、将に成就されんとしているからである。

「意識とは、様々な可能的行為の、あるいは潜勢的、現働性、の圏域 la zone d'actions possibles ou d'activité virtuelle に内在する光であり、この圏域が、生ける存在によって実効的に成就される行為を取り囲んでいる。意識が意味しているのは、躊躇あるいは選択である。いかなる行為も現実にならぬまま、等しく可能的な諸行為の多くが描出される際には、意識の張りが強くなる」 (EC, 145) — 引用 G

引用 G において、「可能的」と「潜勢的」という二つの語は区別して用いられている。一方で複数の行為が成就されうる場合、いずれの行為も「可能的」であって「選択」しうる。ここで問題になっているのは、原則的

には知性である (cf. EC, 145-6)。可能的行為は、複数形で示されているとおり「様々」である。他方で、当の諸行為は、いずれも「現実にならぬまま」、未達成とされていない。「将に生まれんとしている行為」 (EC, 263, cf. 228, MM, 71, 83, 86, etc.) であり、当の行為を「将に成就せん」 (MM, 118, cf. EC, VII, 12) とわれわれは「身構え attitude」 (EC, 2, 188, 332, cf. MM, 18-9, 100-1, 146, 256) を取っている。「潜勢的現働性」——こちらは単数形——とは、こうした身構えを意味している。知性たる意識においては行為の成就までに「躊躇」があり、現働性が「潜勢的」であるかぎり、「潜勢」性と行為の「現実」性との間には時間的な隔たりが存する。存在論的相対性はその隔たりの意味が明確になる。時間的な隔たりである。知性に謂う「内部」とは、未だ「潜勢的」な諸行為のその選択肢が、時間的な隔たりを介して知性の眼前に再現表象として現出する「圏域」のことなのである。「知性の眼」に開かれてくる「内部世界」である。意識の「光」は、潜勢的現働性の及ぶ実践的意識の「圏域」を照らしている。選択肢とは、「将に來たらんとしている運動 le mouvement à venir」 (cf. MM, 118) のその「将来 avenir」の諸行為にはかならない。行為の成就される場たる物質世界も、認識の場も、したがってまたそこに現れる再現表象も、存在論的相対性を免れない。以上が第一の難問——知性の内部性——についてである。

してみると逆に本能それ自体は、認識論的には限定され相対的だとしても、存在論的絶対性を具えているのではなからうか。節足動物にとっては選択肢が立たず、「物質世界」が存立しないからである。第四の難問に取りかかる。なるほど本能の向かう、先は外部である。本能においても「意識」は存在しており、「再現表象」も存在している (EC, 145, cf. 147)。しかし本能の「非意識的認識」それ自体を取り上げるなら、「内面的」であるだろう。それ自体としては「内面的」なる本能の「認識」が「外部化した」 (cité supra) 行為に結実するわけである。実際ベルクソンは、節足動物(膜翅目)たる穴蜂を例に、その獲物たる青虫についての「体得知 science」を、知性的な認識と対比しつつ、以下のように提示する (EC, 174-5)。「昆虫学者」のとき

知性なら「青虫を、他のあらゆる事物を認識する場合と同様に、すなわち外側から、自分のほうでは、特定の生ける利害関心、un intérêt special et vitalを持たずに認識する」。知性は「事物」を「外側から」認識するのであった。認識論的相対性と存在論的相対性である。これに対して本能においては、「特定の利害関心」が働いている。当の利害関心は、認識論的に限定されている。しかしそれは「生ける」利害関心でもある。「内側から」与えられる「共感」であり、「急所感情」である。こうした知性的認識に対して、

「穴蜂とその獲物との間に（その語の語源的な意味で）一つの共感を、穴蜂に内側から、青虫の急所をいわば教えずような共感を想定するならば、事態はもはや同じではなくなる。この急所感情なら、何ら外部知覚に負うことなく、穴蜂と青虫とがただただ対峙するだけで結果しうる。両者はもはや二つの有機体ではなくて、二つの現働性 deux activités と見なされる。この感情なら、凝縮による具体的な形で、一方の他方に対する関係を表現していることだろう」（EC,175）——引用H

穴蜂と青虫とはもはや「二つの有機体ではなく」、「一つの共感」において一つの有機体と成っている。「本体の実在性において réellement ……一つに結びついた有機体」（EC,167）である。両者は「一つ」たる「共感」における「二つの現働性」であり、「急所感情」において一つに成っているわけである。穴蜂の有する青虫についての本能、その「体得知」たる「共感 sympathie」とは「語源」どおり、一体化した sym(sun) 受動感情 pathos の謂いであり、感情の分有という「関係」を意味している。「生が物質を有機的に組織化する活動」は、本能へと「繰り延べ」られる（EC,166-7）。「動物の諸々の本能」と「細胞の生の諸特性」とには「同種の「体得」知と同種の無知が顕れて」（EC,168, cf. 140）おり、「一つの共感」に対する「二つの現働性」は、「一つの生物に対する複数のその細胞に等しい。「一つの巢の集団」における蜜蜂どうしの関係もそうである（EC,167）。「自己自身に共感する一つ、全体で

ある」（EC,168）。かくして本能の内面性に関する第四の難問は解決される。本能の共感においては、その認識対象——それを「対象」と呼べるならだが——たる他の生物は「事物」ではない。認識するものと認識されるものとの間にあるのは、「事物」どうしの関係ではない。自らと一体に成っている他方の「現働性」との「関係」である。「現働性」は「二つ」と数えられるにせよ、当の二つの現働性の間には隔たりはなく、存在論的絶対性が成立している。「事物」なき「働き」「二つ」なる「有機的組織体以前の働き」である（EC,175）。「穴蜂とはいえ、それが把握しているのは、なるほどおそらくほんの僅かの力にすぎず、自らの利害関心にびたりかかわるものにかざられるが、少なくともこれを内側から把握する」（EC,176）。この場合「把握 saisir」とは、「知性的な」知覚や認識以前の共感、「再現表象されることなく生ざられる」（「原」直観「潜勢的意識」のことである（EC,175-7,167）。その際「把握」される「力」——「生の有する発生の力」（EC,167）——は、なるほど節足動物においてはすでに「ほんの僅かの力」に「特定」化されている。それ以外には「無知」である。とはいえ当の「力」とは、ほかならぬ「現働性」のことである。なるほど「共感」たる「把握」そのものは他の現働性との関係の知であろう。この関係知は自己知のごとき直接知の把握ではない。しかし、自己の現働性についての自己知とこの関係知があれば、他の現働性を知るには十分である。なるほど「本能が行為へと外部化せずに認識へと内面化する」（EC,166）などということはない。が、共感それ自体は、行為へと外部化して発散してしまうことなく、内面の「体得知」に止まりうる。関係する先の他の現働性は、内面の体得知たる本源の関係知——外部性なき無媒介の関係知——のうちに織り込まれている。他の現働性は、自己の内面で自らの現働性と響き合っている。そのかぎりで青虫の現働性は穴蜂の内面に位置づけられる。「把握」は「内側から」為される。この関係知のなかで穴蜂も、自己の現働性において、青虫の現働性を認識する。そうした「本能の認識は、…ほかならぬ生の一体性にその根を有する」（EC,168）。

かくして一方で、第三の難問も自動的に解決される。原一直観（連言）と

直観(強選言)との関係とは違って、原一本能は本能へと進化発達する際も「自己自身に対して内面的なままに留まる」(cite supra)のであった。右に記した「共感」の「内面」性である。したがってわれわれ人間の原一共感も、共感と同じく、対象との関係において「内面的」である。内面の原一意識にはかならない。引用Cの反実仮想は、条件文の後半には該当しない。「自らに反響する」原一意識——自己知——たる原一共感は、同時に「自らの対象に反響しうる」。この場合「自らの対象」というのは、一つの原一共感における他の現働性のことにほかならない。生物進化上の「初源の現働性 une activité rudimentaire」(EC,111)の関係である。われわれはそれについて「漠たる感情 sentiment vague」(EC,179)しかもちえない。しかし「反響 réflexir」は、隔たりなき「反射・反省 réflexir」として、現働性⁽²⁷⁾どうしの響き合う関係を表現しているのである。してみると他方でさらに、第二の難問——第二の疑問点——も解決可能であろう。知性たる実践的意識の「潜勢的現働性」(引用G)についても、同様に解釈しうるからである。知性の提示する外部の再現表象へと向かわずに——意識の光の圏域に立ち出でることなく——この「潜勢的現働性」の内面に止まりさえすればよい、と⁽²⁸⁾。逆に言うなら、真正の内面性は知性の向かう、先たる物質世界の外に、実践的意識の圏域の外に在る(cite EC,180)。潜勢的意識の、思弁的意識の領野である。この領野においてこそ、進化した脊椎動物の現状における内面の原一共感が、「直観の諸潜勢性」(引用E)と共に働いている。われわれ人間における「潜勢的現働性」は、それ自体としては、共感の現働性に等しい。われわれの内面の感性——思弁的な原一意識——は、外部化する知性の発動の元に在って、自らの現働性において他の現働性をも与える。生の働きをわれわれ人間も「一種の共感とおし対象の内面に身を置き直しつつ、改めて把握する」(EC,178, cf. 248)。内面——本源の関係知——への帰還である。引用Aに表現されていた「自らを超えた外面」とは、存在論的な絶対性の成立する最も内奥の内面における「対象の〔側の〕内面」の謂いであり、当の外面において他の生物の現働性が関係知のなかでわれわれ人間の原一意識に与えられる。行為の未だ成就されて

いない「身構え」における内面の経験である。「把握する saisir」(引用A)(あるいは「改めて把握する ressaisir」)とは、ベルクソン哲学にあっては、内面における経験を意味しているのである(EC,176,178,185, MM,229)。われわれ人間における形而上学的経験であり、感性的認識の第二の特質である。かくして、「何ものかをわれわれは、自らの内で感取し、自らを超えた外面において共感をとおして暴露しうる」(引用A)とは、二種の「反響」のことにほかならない。

では「何ものか」とはいかなる内実を有するのか。原一共感などの「様々な感情現象において……われわれが自身の内で経験しているのは、本能によって行為している昆虫の意識において起こっているはずのその何ものか」(EC,176)である。ただし共感の対象が「特定」化されているのに対して、原一共感の対象は認識論的に絶対的たりうるのであった。なるほど「われわれ」に授与される「何ものか」とは、生物進化上の古い深層という進化の一面にすぎない。とはいえ、言語に絶するその豊かな内容は極限において、地球上の生物すべてを、したがって生の広がり全体をその未成熟な原初状態において網羅する。本能の共感の「その根」は「生の一体性」に存するのであった。われわれの個別的な「二つ三つの記憶 souvenirs」が、「われわれの過去の全体」——「物質と記憶」に謂う「過去一般」(MM,148)——から成る「記憶力 la mémoire」を起点に発出してくるように、本能における共感の「特定」の関係はこの「一体性」から発している。それはまた、本能において「相殺された意識」が活性化して現出しうる所以でもある(EC,168)。原一共感における他者は、共感のそれと比較するなら拡張されている。「何ものか」の内実の一面である。原一共感とは「われわれと爾余の生けるものとの間」(cite supra)の認識関係のことであった。「何ものか」とは、形而上学の領野においてわれわれ人間の感性に与えられるかぎりでの他性を具えた他の生物一般である。そのかぎりにおいて、地球上の「生一般」(EC,178)でもある。

かくして『物質と記憶』をも参照するなら、われわれの自己あるいは純粹記憶力の側から見て、ベルクソンにおける他者は拡張されて三重の広がり

見せる。第一に物質性たる純粹知覚、第二に節足動物において共感される特定の他の生物種、そして第三にわれわれ人間の原一共感の対象たる地球上の生物全体である。しかも、他者—事態の側—に関する関係知—認識の側—であるという点で「何ものか」の内実は一貫している。当の内実の他面である。他性はこの関係知において感受される。

第一の点に関しては、「何ものか」を扱った『物質と記憶』の一節を思い出さないわけにはゆかない。形而上学的経験たる「われわれの無媒介の知覚」が二つの始元から成るといふ「混合の性格」についてこう記されていた。そうした「われわれの〔無媒介の〕知覚においてわれわれが把握しているのは、同時に、われわれの意識の状態とわれわれに依存しない或る本体の実在性である」(MM,228-9)と。「純粹記憶力」と「純粹知覚」である。後者は「われわれに依存しない」一種の他者を意味している。そして両者の邂逅が、当のわれわれの「知覚」において「把握」され「感取」されるその「感覺質」をもたらず。「感覺質」とは、『物質と記憶』の形而上学においては「事物」なき心身結合を意味している。ベルクソンは続ける。

「もし諸々の感覺質がいつそう等質的であつたりなかつたりする際のその基礎が在るといふわれわれの信が基礎を有するなら、当の基礎づけは或る現働的行いによつてのみ可能である。その現働的行いなら、われわれの感取、「感覺質」を超える何ものかを、ほかならぬ「感取される」当の質において、われわれに把握せしめ、あるいは暴露せしめることになる」(MM,229) — 引用 I

引用Aに見られたのと同じの単語が頻出している。「何ものか」、「把握」、「暴露」である。しかも問題になっているのは「われわれ」の形而上学的経験である。しかし大きな相違もある。この「何ものか」とは、われわれによつて感取されるかぎりでの当の「感覺(感取)」の「基礎」たる「純粹知覚」にほかならない。心身結合において「純粹知覚」は「身」の側に組み入れられる。

「心」たる「純粹記憶力」から見た他者である。しかも当の心身結合たる「混合」は、「実在する本体となつてゐる矛盾」(MM,229)、「自己の内面に他性が在るといふ「矛盾」である。直接には知られず、しかも自己の内面に在る他者を俟つてはじめて、自己の「本体の実在性」が成立する。一方でわれわれの自己における「本体の実在性」は、「純粹知覚」たる他者と「純粹記憶力」たる自己との混合においてはじめて成立する。他方で「純粹知覚」は、そうした心身結合たる「感覺質」における他性でありながら、しかもわれわれには、当の「純粹知覚」を直接知において捉えることはできない。事態の側においては、「われわれの感取を超え」ている。ゆえに「何ものか」なのである。当の「純粹知覚」は認識の側の関係知においてのみ感受される。身体と成る以前の—混合以前の—「純粹知覚」は「何ものか」と成つてはじめて、

当の形而上学的経験のなかで本源の関係知—心身関係における「身」の知—において「把握」され「暴露」される。自己が現存するのに必要な他者は関係知においてのみ感受される。

『創造的進化』においてもベルクソンは、物質性と邂逅する生いのちについて、「生いのち、すなわち物質を貫いて発出した意識」(EC,183)たる原一意識についてこう語る。

「事態はあたかも以下のように進行する。いかなる意識もがそうであるように、相互に浸透する膨大な数の潜勢性を担っている意識の一つの大きな潮流が、物質のなかに浸透した。この潮流は物質を有機的組織へと持ち来たらしたが、しかし、その運動は当の物質のせいでも、無限に緩慢になり、かつ同時に無限に分裂した」(EC,182) — 引用 J

しかしながら今度は、ベルクソンは「いかなる意識」についても主張する権利を得ている。今度は「われわれ」の語は不要である。小論冒頭に挙げた第二の疑問点の一部に対する答えである。形而上学上の二つの始元の邂逅は、生物一般にまで拡張される。「生いのちの内への張り緊め〔intention〕たる「意識の

一つの大きな潮流」、その「上昇」運動が「物質」——いつそう精確には物質性——の「張り緩み *se détendre*」たる「張り拡がる *s'étendre*」運動、その「下降」運動のなかに「浸透」し、それと混合する際に「有機的組織」たる生物は発生する (cf. EC, 11, 178, 204, 208)。『創造的進化』第二章の後半 (EC, 168) において小文字で記されて一度規定され、第三章冒頭に大文字で記される「〈意識一般 *la Conscience en général*〉」(EC, 187) にほかならぬ。「本能と知性の両者がともに……離脱してくる唯一の基礎」であり、「普遍的な生いのちと拡がり

を同じくするはず」(EC, 187) の〈意識〉である。当の〈意識〉はこうした混合において生物の意識となり、進化発展するなかで地球上のあらゆる生物種へと分岐し「分裂」してゆく (EC, 179-80)。そうやって自らを「限定」し、実践的意識と成る。われわれのほうはといえば今度は、事態の側における〈意識〉のこうした「運動」についてゆることが——直接知においてではなくて、われわれの関係知においてであるが——できる。今度は認識の側でも、自己以外の生物について、その心身結合を主張しうる。われわれ人間の原―共感には「何ものか」が授与されているからである。〈意識〉に「類似する何ものか」(EC, 180) である。一面では、われわれにおいて「何ものか」は、節足動物における「特定の対象」を超えて、われわれに授与される言語に絶する豊かな他者の内容を表しているのであった。他面では「何ものか」の内実は関係知において感受される他性のことであった。かくして、この両面を合わせるとこうなる。われわれ人間は、その古い深層の原―共感のその関係知において、生物であるかぎりでの他の生物一般についての形而上学的経験を有する。「事物」ではなく、他の「現働性」たる生物である。われわれは、『物質と記憶』において解明された心―身結合の関係を、『創造的進化』においては自己と生物一般の関係に拡張することができる。生いのちの広がり全体が、本源の関係知において、われわれの自己における他性となって与えられる。

かくして生いのちの因果性は、「われわれ」人間には関係知においてのみ感受される。「何ものか」とはその当の事態の側に関する認識の側の表現である。この生ける因果性は生いのちと物質性との混合により、「本体の実在性」を成して

いたのであった。そうした混合はあらゆる生―物に共通である。してみると、生の因果性もまた「実在する本体となっている矛盾」(*cite supra*) である。自動性を意味する物質性たる「下降」運動は、「内面の働き」を意味する生いのちたる「上昇」運動には一種の他者である。そうした「矛盾」する二つの方向の混合において生物は発生する。引用 A によれば、諸原因と結果との関係は、双方向的であった。諸原因が「結果を限定」するとは生いのちの「上昇」運動のことであり、「結果によつて限定」されるとは物質の「下降」運動のことだと解される。両者の混合たる生物はこうした双方向的な運動のなかで、一方では持続し、発達成長し続ける。かつ他方では、停止し、固体化し続ける。生物の形態とは、流動的な当の生物たる「本体の実在性」にあつて、生ける因果性のその一つの方向たるかぎりでの結果、常に産出され続けている結果なのである。因果律における結果たる形態が諸原因の外部に位置するのは違つて、結果たる形態は因果性に含まれている (cf. EC, 130)。小論の第三の疑問点に対する答えである。生物進化上の形態は「相対的に安定」(EC, 129) しているにすぎず、絶対的な固定性を具えているわけではない。生の運動に対する物質性の「抵抗」(EC, 95-6, 99, 128, 255) による一時「停止」である。そしてそうした一時「停止」の都度、生物種が定まることになる。生いのちの力を得た「深層」の「種の努力」(EC, 171) によつて、物質性を取り集めつつ、前進を続けるわけである。なるほど事態の側における地球上の生物全体のこうした生いのちの因果性そのものは、「われわれ」の感性の直接知の及ぶ範囲にはない。われわれ人間が自らの認識の側において有するのは本源の自己知と関係知にすぎない。「生の理論」は一面では「認識の理論」よりも射程が広い。しかしそれでも、そうした本源の関係知は、形而上学的経験となつてわれわれ人間の古い深層に与えられている。かくして『創造的進化』は、『物質と記憶』において確立した形而上学を生物進化の文脈に置き直すことによつて、形而上学的な心―身関係を自己と他のすべての生物との関係に拡張し、形而上学的経験に与えられる他者を生物一般に拡張することに成功した。原―共感を発見したおかげである。ベルクソンの言う「何ものか」とは、こうした

他者の拡張に際しても、一貫して形而上学的経験に与えられる他性を表現している。他人たる他性を具えた人間認識も、こうした他の生物の認識を土台としていることだろう。

付記 小論は病を得て後、いわば復帰第一戦となった。医師の谷口修一先生、辻正徳先生、池邊太一先生、田結庄彩知先生、太田光先生ならびに看護師の高野亜耶さん、五味新吉さん、成田円さんをはじめとする虎の門病院一三階および六階のスタッフに感謝したい。単なる医療行為を超えた彼らの努力がなければ、小論が陽の目を見ることはなかったであろう。

なお紙数の都合で註はすべて割愛したが、註番号は残した。註は個人的にお配りしたい。